

室内の温度差をうまく利用して 風の流れをつくる

空気は温度の低いところから高いところへ移動し対流します。この風の出口となる窓を階段や吹き抜けなどの建物の最上部に設けると、夏は上部にたまった熱気が排出されるとともに強い上昇気流がおこり、窓から風が室内に導かれます。この場合、建物内の風道をきちんと確保することが重要となります。この建物最上部の窓は、冬も少しだけ開けておくことによって、空気の滞留がなくなり室内の汚れた空気とともに上部の湿気を吐き出し、結露の防止にもつながります。



エアコンがなくても 快適な家になるノウハウ8選

リフォームの際に役立つコツをお伝えいたします。
必ずこれまで以上の住環境を手にすることができるはずです!



「高性能ガラス」で 家の断熱性をアップ!

住宅の中で最も熱の出入りが激しい場所が「窓」です。ですので、窓が断熱化されていないと、いくら壁や屋根に高性能の断熱材を入れても大きな効果は期待できません。窓の断熱性能を上げるには、高性能のガラスを用いると通常の単層ガラス(シングルガラス)の倍以上の断熱性能が得られます。

断熱材で熱の侵入と 流出を防ぐ

室内の快適な生活を左右する「温度」は、高いところから低いところへ移動します。夏は暑い日差しを入れたくないけど、冬は温かい暖房の熱を室内に留めておきたいものです。そこで活躍するのが「断熱材」。壁、床、天井、屋根など熱が入りやすい部分に断熱材を導入することで、夏は熱の侵入を、冬は熱の流出を防げるようになります。

直射日光を遮って 涼しく、冬は取り込 んで暖かく

直射日光の暖かさ(放射熱)は、部屋の空気は暖められませんが、焚き火のように「モノ自体」を暖めます。住まいの快適性に影響を与える放射(直射日光)とうまく付き合うコツは、夏には室内に直接侵入しようとしてくる放射を建物の外で遮り、逆に冬は放射を遮るものをなくして、直射日光をできるだけ室内に取り込むようにしましょう。



南面の軒やひさしは 出しすぎないのがポイント

日差しとうまくつき合うために注意したいのが、窓の軒やひさしの長さ(出寸法)です。ひさしは夏の日差しを遮る役目をしてくれますが、逆に大きく出しすぎると、大切な冬の日差しが取り込めなくなってしまいます。理想的なひさしの出寸法は「開口面の高さ×0.3」が目安です(南側窓の場合)。ひさしだけでは遮れない日差しは、すだれやよしずなどを併用しましょう。日差しは必ず窓の外側で遮るようにしてください。



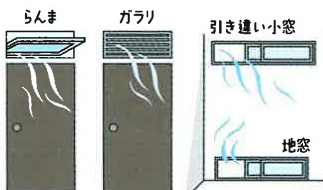
北は高断熱タイプ、 東西は遮熱・高断熱タイプの ガラスを

最近では高性能ガラスが普及していますが、これらは方角別に使い分けことができます。南面のガラスには「高断熱タイプ」が適しています。「遮熱・高断熱タイプ」を使ってしまうと、南面から取り込みたい冬の日差しまでカットされてしまうからです。南面の夏の日差しはすだれ・よしずを併用して遮るのが良いでしょう。東西には、「遮熱・高断熱タイプ」を使用します。軒やひさしで防ぎきれない強烈な夏の日差しをカットしてくれます。日の当たりにくい北面は「高断熱タイプ」で結露対策にも有効です。



住まい全体の空気を動かして 快適な空間に

個室の扉が閉じられていると「通風」の恩恵がなくなってしまいます。そこで考えたいのがドア(扉)の形状。できるだけ開き扉ではなく、通風の調整がしやすい「引き戸」を選ぶことをおすすめします。どうしても開き扉になる場合は、扉の上部にらんま(欄間)やガラリ、引き合い小窓、地窓などを設けておくと、各個室の通風がよくなります。建物全体を空気が絶えず移動していると、各所の温度差が少なくなり、夏の熱気を逃して涼しく、また湿気の滞留も防いで結露防止にもなります。



南の日差しをたくさん取り込 んで暖房いらず

吉田兼好の『徒然草』に「家のつくりようは夏をむねとすべし」という言葉がありますが、現代の家づくりでは「冬をむねとすべし」とする必要があります。建物が南側に向いていれば暖かい日差しを取り入れることができ、自然の力を最大限利用した暖房能力がまかなえます。その分、夏の太陽熱はすだれやよしずなどを利用して日差しを窓の外側でカットすれば問題ありません。